発行所:マグナス インターナショナル（発行人:鳥居 欣一）URL: https://www.OmoiyariWorld.com　Email: oncochishin2024@gmail.com

ウンコの通知簿

北村 豊

うんこ漢字ドリルが、驚異的なベストセラーになったのは、幼児教育が専門の三重大学教育学部の富田昌平教授が論文「幼児の下品な笑いの発達」の中で「日常性からの逸脱というところにうんこ好きの理由がある。日々の何気ない日常会話の中に、ひょいと〝うんこ〟という非日常性が投げ込まれると、そこに笑いが爆発する」と述べている。ただうんこへの反応も年齢と共に変化するという。それを示すように小学3年生位まではうんこ漢字ドリルもよく売れるが、学年が上がるほど売れ行きは減るという。

さて、何故初っ端からこんな話を書いたかというと、今回の号のテーマが「懐かしさ」だったからである。

私は戦後の団塊の世代の昭和23年生まれで、来る日も来る日もおやつはサツマイモという日々もあった。そんな日常でも母の手作りの漬け物が食卓に上らない日はなく、カブ、キュウリ、ニンジン、スイカの皮の浅漬けなど色々であったが、何といっても主役はダイコンで、家族の好物でもあったのであるが、なんと当時飼っていた柴犬のチビも大好物でパリパリといい音をたてながら食べていたのもとても懐かしく思い出す。

その当時の奈良市内には下水道なんてものは無く、「ぽっとん便所」に溜まった我が家の困り物のうんこは、農家の人が無料でこぼさずに肥たごに汲み取って下さるロー・テク?いや今となってはその技術を持つ人を探すのが困難なハイテクに値する有難い時代であった。さらに農家の人は11月から12月頃になるとリヤカーに秋蒔き大根を山のように積んで「御礼」として持って来て下さるのが〝我が家の風物詩〟となっていたことを秋になるととても懐かしく思い出す。

化学肥料もない当時の農家では、糞便を畑近くの〝田舎の香水〟の漂う肥溜めで十分に発酵させ、肥焼けしないよう希釈して畑の貴重な肥料としてリサイクルしていたのである。

便槽を綺麗にしてもらった上、私達のし尿で元気よく育った大きな大根を感謝の気持ちとしていただくなんて、何と嬉しいことではないだろうか！

鎌倉時代に本格化し、1960年代まで続いた世界にも類を見ないであろうこの〝し尿循環システム〟は、その後、お金を払うバキュームカー、そして下水道へと変化していったが、昔の少年時代に見かけたし尿と大根の物々交換には、それをごく身近に見てこそ感じられる〝お互いの温かみのある心の通い合い〟があったのだった。

◆ し尿は商品

歴史を紐解いてみると、し尿の農地還元は、鎌倉時代から本格化し、江戸時代にはし尿は肥料の原料となる立派な〝商品〟として売買されていたそうである。SF作家で、学者でもある藤田雅矢著の「糞袋」（1995年初版、新潮社）によると、昔は〝し尿の質〟によって甲・乙・丙・丁の四段階に分けられていたそうだ。甲や乙は栄養価の高い食事をしていた花街や公家・大名のモノで、価格が高く、一番価値が低かったのが牢屋のモノであったそうだ。

団塊の世代で育った私たちの小さな頃の〝落とし物〟は、江戸時代に遡って買い取ってもらうとすれば、戦後直後ほどではないが食糧難でもあった時代であったので、買い取り人の評価は、まさか甲や乙なんてことはあり得ず、丁ではないだろうから丙であったのだろうと勝手に思っている。

うんこ漢字ドリルがもちろんのこと無かった時代に育った私だが、旧奈良市街の大仏殿から徒歩6～7分の近距離の所に生まれた私は、シカの糞を思い出してもノスタルジア（懐かしさ）を感じている。

◆ 美しいルリセンチコガネ

それは春日大社の神鹿として古代より若草山から奈良公園にかけて棲息するこのニホンジカのおかげもあり、糞の排泄量は年間数百トンにも上ると言われているが、それを排泄後数日で片付けている主役が一般には糞虫と呼ばれている食糞性コガネムシなのである。そのおかげで、糞はよく見かけるものの、短期間にその形は消えてしまうという好循環を形成している。

そのおかげで、日本の食糞性コガネムシの約150種の内、50種類もが奈良公園で観察されていて、この種類の虫にとっては、ユートピアのような存在になっていることは確かである。シカの主食は鹿せんべいでは無く、ノシバである。このノシバは奈良公園で食されることによって他地域の日本の自生種であるノシバとは1300年以上をかけて遺伝子が変化してきて、食されることによってより芽を出すという変化が研究では認められている。

私が中学生の頃から奈良には、大和昆虫愛好会という、主として奈良公園や春日山の昆虫の分布や種類を調べて定期刊行物にする会があり、虫は無視できない私もその一員として勉強はそっちのけで昆虫と向き合っていた。その昆虫の中でも美しさでは是非知っていただきたいのが、体色が棲む地域によって変化するオオセンチコガネのうち奈良公園に棲む宝石のように美しい、通称ルリセンチコガネである。

一度見るとその美しさに見た人は誰でも魅了されてしまうこの昆虫は、正に〝才色兼備〟で、シカの落とし物の処理にも日々努力してくれている。そのおかげで奈良の芝は千年以上も無肥料で、連作障害も起こさず、シカによる広大な面積の芝刈りのお陰で、奈良市の財政に大きく貢献している。

◆ 賢明な人

さて、〝過去を懐かしむ〟ことは、現在の社会では、「また昔のことばかり話している」と言ってネガティブに見られがちなのが実態ではないだろうか?

最近の脳科学の研究では、そのような見方を大きく変える知見がいろいろ判明してきている。

「昔を懐かしむ」ことによって、脳で唯一の神経細胞の再生が認められている海馬を刺激することによって、①記憶力の維持と改善、②感情の安定とポジティブな気持ちの喚起、③自尊心の向上、④コミュニケーション能力の向上などが出来ることが判って来た。

さあ、懐かしむことを始めてみませんか?

さて、筆を置く前にホモ・サピエンス（ラテン語でヒト）の意味をご存知だろうか？「賢明な人」という意味なのである。

私は「賢明な人」でありたいと願うホモ・サピエンスではあるが、未だその境地には達しておらず、自己評価では厚かましくも「ほぼサピエンス」といったところであろうか….。

私は、ヒトやシカのうんこや大根、そして大好きな昆虫を大いに懐かしみたいと思います。さて皆様は何を懐かしんで「賢明な人」になる〝前向きな努力〟をされるのでしょうか?

ルリセンチコガネ

北村 豊（きたむら　ゆたか）

1948年奈良県生まれ。昆虫の研究では有名な東京農業大学の昆虫学研究室で2年近く学ぶ。神奈川歯科大学卒業。青年海外協力隊員として、3年間マレーシアで先住民の歯科治療に従事。今までに国際医療協力でマレーシア、バングラディシュ、カンボジアなど滞在した国多数。現在、松本歯科大学病院臨床教授（口腔外科）、長野県小布施町「信州口腔外科インプラントセンター」所長。